

福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む 文のピッチパターン^{ie0}

久保智之

要旨

福岡市方言では、疑問詞（「ダレ」、「ナニ」等のいわゆる wh-word）があると、そこから文末まで、だらだらと平らなピッチが続くが、途中にその疑問詞を受ける「カ」、「モ」、「デッチャ」〈……でも〉、「タッチャ」〈……ても〉、「カイナ」〈……かな〉のどれかがあると、そこで平らなピッチは終わる。実はこの現象の一部は、つとに早田(1985, pp. 25-27)において指摘されている。しかし本稿では、より広範囲の言語現象をカバーし、ために記述もかなり異なったものとなった。

0. はじめに

ここでいう福岡市方言とは、福岡県福岡市およびその周辺部で話されている方言であるが、分析の中心となる言語資料は、筆者自身の内省による。筆者以外のインフォーマントの言語事実については、注で触れるが、若干の語彙的な差異はあるものの、本質的には筆者の個人方言におけるのと同じ現象が、福岡市方言に存在すると考えられる。なお、筆者が方言を使う環境は、かなり親しい間柄だけに限られているため、例文も、男性の使う、かなりくだけたスタイルのものである。

さて、筆者の方言のアクセント体系であるが、名詞のアクセント体系は、所属語彙の出入りは少しあるものの、パターンは東京方言と同じである。形容詞と動詞には、アクセントの対立はない。^{注2}以下では、ピッチの高い部分だけを上線で示す。ノは文末の上昇調を示す。例文の分かち書きは、読みやすくするために、別に音韻句境界などを示しているわけではない。例文中の読点はポーズを示す。意味をとりにくいと思われる例文にだけ、なるべく対応するような「東京方言訳」を、くくに入れて示した。*印は、その文が非文法的であることを示す。なお、例文の中には、普段使わないような、かなり複雑かつ不自然なものも含まれているが、あくまで文法規則の検証のためである。

1. 疑問詞が1つしかない疑問詞疑問文 (wh-question)

1-1. 疑問詞が文頭にある場合

まず、疑問詞を含まない単純疑問文 (yes/no question) (2) では、文末が上昇調になるということを除いては、平叙文 (1) とかわらない。

(1) オレ キョネン キョート イッタゼ

(2) オマエ キョネン キョート イッタトヤノ〈おまえ去年京都市行ったのかい?〉

「ト」は東京方言の「ノ」にあたる名詞化辞、「ヤ」は、疑問詞疑問文 (wh-question)

(2) 福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン

にも単純疑問文 (yes/no question) にも現れ得る (無くてもよい) 疑問の文末助詞である。

ところが、疑問詞を含む疑問詞疑問文 (wh-question) になると、文末の上昇調というイントネーションに加えて、全体のピッチが平らになる (下がり目がなくなる)。文頭の第1モーラが低いのは、東京方言などで、音韻句の第2モーラが高い時、第1モーラが低いと同じ現象である。

(3) ダレガ キョネン キョート イッタトヤノ

この文を次のように言うと、非常におかしい。

* (4) ダレガ キョネン キョート イッタトヤノ

1-2. 疑問詞が文頭以外にある場合

次の例、(5)(6)と(7)(8)からわかるように、ピッチが平らになるのは、疑問詞の後ろだけで、疑問詞の前では、ピッチは平らにはならない。

(5) ダレガ キョート イクノ

(6) イツ キョート イクヤノ

(7) キョート ダレガ イクノ

(8) キョート イツ イクヤノ

次のように、文がいくら長くなっても、疑問詞が前にあれば、ピッチは平らになる。また、音韻句は切れない (これについては4-1で詳述する)。

疑問詞がない場合

(9) オマエ ワザワザ オレガ クローシテ キョートカラ カッテキタ ヤツハシ
クッテシモータトヤノ <おまえ、わざわざおれが苦勞して京都から買った八ツ橋、食っちゃったのか?>

疑問詞が文頭にある場合

(10) イツ オマエ ワザワザ オレガ クローシテ キョートカラ カッテキタ ヤツ
ハシ クッテシモータトヤノ

疑問詞が文頭以外にある場合

(11) オマエ ワザワザ オレガ クローシテ キョートカラ カッテキタ ヤツハシ
イツ クッテシモータトヤノ

また、文中での疑問詞の線的 (linear) な位置のみが問題なのであって、次のように、疑問詞が埋め込み文 [] の中にある時でも、現象としては全く変わらない。

(12) [ドンナシゴト ショー] ヒトト アノヒト ケッコシタトノ <どんな仕事してる人とあの人結婚したの?>

ここで、疑問詞自体のピッチについて見ておく。単独形では、筆者の意識としては、疑問詞は次の様なピッチ形をとる。

(13) ダレ イツ ドコ ナニ ドッチ 下ノ 下ー ドンナ イクラ

これを次のように平らにすると、それはセンテンス (疑問文) になる。

(14) ダレ イツ ドコ ナニ ドッチ ドフ ドー ドンナ イクラ

つまり、疑問詞疑問文では、疑問詞を含んでそれ以後が、ピッチが平らになり、かつ1つの音韻句をなす、と考えられるのである。

1-3. 間接疑問詞疑問文 (indirect wh-question)

しかし、上の観察は、以下のような間接疑問詞疑問文（疑問詞疑問文に「カ」をつけて埋め込んだもの）の場合には、あてはまらない。

(15) ダレガ キョート イクカ ワカラン <誰が京都行くかわかんない>

間接疑問詞疑問文のマーカ「カ」の手前までしか、ピッチは平らにならないのである。この文は、決して次のようには言えない。

* (16) ダレガ キョート イクカ ワカラン

いままで見てきた疑問詞疑問文を、(15)のように埋め込んでも、全部「カ」の手前で平らなピッチはおわる。そこで、以上の観察をまとめて、次のように記述しておく（最終的な定式化は4-2で行う）。

規則 version 1

疑問詞があったら、そこから始めて、間接疑問詞疑問文のマーカ「カ」の手前まで（なければ文末まで）、ピッチを平らにし、「カ」まで（なければ文末まで）を1つの音韻句にせよ。

2. 疑問詞が複数ある疑問詞疑問文 (multiple wh-question)

2-1. 複数の疑問詞が、同一のセンテンスに現れる場合

この構文では、以下の(17)(19)のように、2番目(以降)の疑問詞の直前で音韻句が切れ、新しい音韻句が始まる。(18)は不可である。(20)のように2つの疑問詞が並んでいる場合にも、音韻句が切れないと、(18)ほどではないが、やはり不自然である。

(17) ドコノ ダイガクノ ガクセーガ ナンニン キタツテノ

* (18) ドコノ ダイガクノ ガクセーガ ナンニン キタツテノ

(19) ダレガ ドコニ イクツテノ

? (20) ダレガ ドコニ イクツテノ

そこで、規則 version 1の付則として、次の規則を立てる。

同じセンテンス内に複数の疑問詞があったら、それぞれの疑問詞から新たに音韻句を始めよ。

間接疑問文の例を1つ挙げておこう。

(21) ダレガ ドコニ イクカ ワカラン

2-2. 複数の疑問詞が、異なるセンテンスに現れる場合

これは、例えば次のような構文である。

(22) [文1 ダレガ [文2 オレタチガ ドコニ イクカ] シットートヤ] ノ

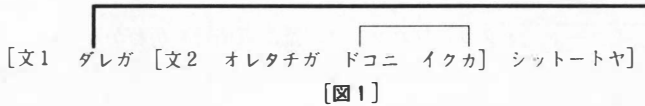
(4) 福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン

〈誰がおれたちがどこに行くか知ってんだい?〉

この例では、「ダレ」と「ドコ」という2つの疑問詞が、文1と文2という異なるセンテンスに出現している。規則 version 1が予測する次のようなピッチ形は、不可である。

* (22') ダレガ オレタチガ ドコニイクカ シットーヤ

そこで、規則 version 1中の「カ」に、「当該の疑問詞を受ける」という限定を付ける必要のあることがわかる。(22)で説明すれば、かかり受けの関係は [図1] のようになる。

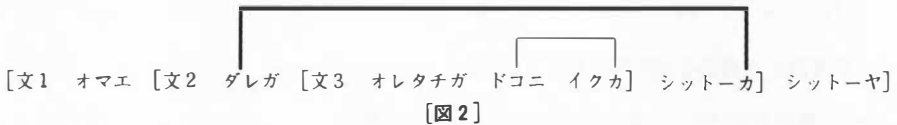


「ダレ」を受ける「カ」がないことにより、「ダレ」から文末まで、平らなピッチが続くことになる。この場合、文2は、「ダレ」で始まる文1に完全に含まれているので、文2中の「ドコ……カ」のピッチは問題にならない。

疑問詞が2つあって、どちらを受ける「カ」もある場合を次に示そう。

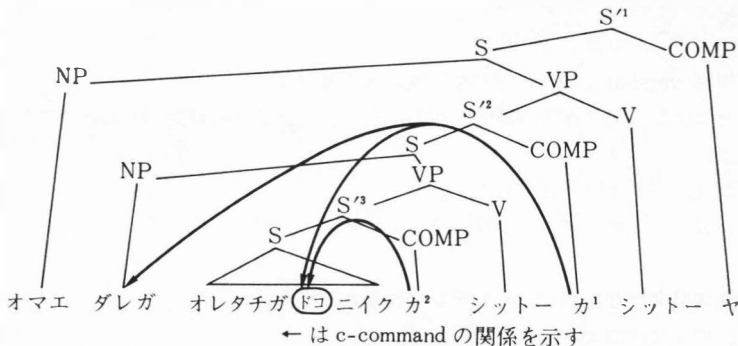
(23) オマエ ダレガ オレタチガ ドコニイクカ シットーカ シットーヤ くおまえ、誰が、おれたちがどこに行くか知ってるか、知ってるか?

この文には、[図2] のようなかかり受けの関係がある。



ここでも、文3のピッチパターンは問題にならない。

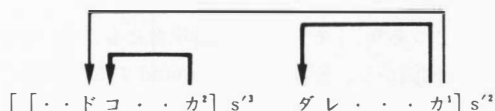
ここで、例文(23)の枝分かれ図(tree diagram) [図3]からわかるように、「当該の疑問詞を受ける」というのは、「当該の疑問詞を c-command する」と定式化できるであろう (c-command: Xを支配している最初の枝分かれ節点がYを支配し、かつXとYのあいだに支配関係がないとき、XはYをc-commandする、と定義する)。



[図3]

実はこの例では、「カ¹」は「ダレ」ばかりでなく、「ドコ」をも c-command しているのだが、この場合は、「ダレ」から始まって「カ¹」の手前まで続く平らなピッチが大きく覆い被さっているので、「カ¹」が「ドコ」を c-command していても、いなくても、別に関係ない。ここで、(23)の文3の部分を中心に前に出した次の例文と、その c-command の関係を表わす [図4] を見ていただきたい。

(24) オレタチガ ドコニイクカ ダレガ シットーカ シットーヤノ



[図4]

「カ²」が「ドコ」を受け、「カ¹」が「ダレ」を受けているのだが、c-command の関係で言えば、「カ¹」は「ドコ」をも c-command することになってしまう。そして、規則どおりにいくと、「ドコ」から「カ¹」の手前まで、平らなピッチが覆ってしまうことになる。

* (25) オレタチガ ドコニイクカ ダレガ シットーカ シットーヤノ

「カ²」は「ドコ」だけを、「カ¹」は「ダレ」だけを受け、というのを定式化するためには、「当該の疑問詞を c-command する『カ』」というのを、「当該の疑問詞を c-command する最初の『カ』」と修正すればよい。さらに、規則は左から右に繰り返し適用されるものとする。まず、「ドコ」を c-command する最初の「カ」は「カ²」であるから、「ドコ」から「カ²」の手前まで、平らなピッチが続く。次に、「ダレ」を c-command する(最初の)「カ」は「カ¹」であるから、「ダレ」から「カ¹」の手前まで、平らなピッチが続くのである。

そこで、規則 version 1 を次のように改訂する。

規則 version 2 (左から右に、繰り返し適用)

疑問詞があったら、そこから始めて、それを c-command する最初の「カ」の手前まで (なければ文末まで) ピッチを平らにし、その「カ」まで (なければ文末まで) を1つの音韻句にせよ。

3. 「モ」と「デッチャ」〈……でも〉・「タッチャ」〈……ても〉

さて、よく内省してみると、平らなピッチが続くのを阻止するのは、「カ」だけではなく、「モ」、「デッチャ」〈……でも〉、「タッチャ」〈……ても〉もそうであることがわかる。

3-1. 「モ」

「モ」が「カ」と同じふるまいをするということを示す例を、いくつかあげよう。^{注5}

(26) ダレガ キョート イッテモ イーヨ

(27) イツ キョート イッテモ イーヨ

これらは疑問文ではないが、疑問詞から「モ」の直前までピッチが平らになる。次例が示すように、疑問詞の前では、ピッチは平らにはならない。

(6) 福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン

(28) キョート ダレガ イッテモ イーヨ

(29) キョート イツ イッテモ イーヨ

次のように、「名詞句+モ」という構文でも同じである。

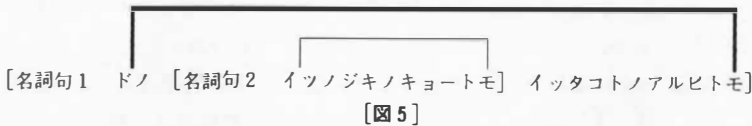
(30) ドノジキノ キョートモ イートコロガ アローガ くどの時期の京都も、いいところがあるよ

以上の例ではいずれも、疑問詞から、それを c-command する(最初の)「モ」の手前まで、平らなピッチが続いている。

さて次のように、疑問詞が2つあり、「モ」も2つある場合にも、ピッチが平らになるのは、「カ」の場合と同じく、疑問詞から、それを c-command する(最初の)「モ」の手前まで、である。

(31) [名詞句1 ドノ [名詞句2 イツノジキノ キョートモ] イッタコトノ アルヒトモ] キョートワ イーッテ ユーネー くどの、いつの時期の京都も行ったことのある人も、京都はいいって言うね

ここでは、[図5] のようなかかり受けの関係がある。



次のようなピッチ形は不可である。

* (32) ドノ イツノジキノ キョートモ イッタコトノ アルヒトモ

3-2. 「デッチャ」・「タッチャ」

「デッチャ」〈……でも〉、「タッチャ」〈……ても〉に関しても、全く同じことが言える。

(33) ダレデッチャ ヨカヨ 〈誰でもいいよ〉

(34) イツ キョート イッタッチャ ヨカヨ 〈いつ京都行ってもいいよ〉

(35) キョート イツ イッタッチャ ヨカヨ

「デッチャ」、「タッチャ」については、「カ」や「モ」の場合のように、サイクルを異にするセンテンスに複数現れるということはないが、現象としては全く同じものと見てよからう。次に、「カ」と「タッチャ」が相異なるサイクルに現れる例を2つ示しておく。

(36) ダレニ イツ キョート イクカ ユータッチャ ヨカロモン 〈誰にいつ京都行くか言たっていいじゃない〉

(37) イツ キョート イクカ ダレニ ユータッチャ ヨカロモン

(36)では、「ダレ」を c-command している(最初の)「タッチャ」で、(37)では、「イツ」を c-command している「カ」と「タッチャ」のうち、最初の「カ」で、まずピッチが下がる。

こういった現象は、「カ」の場合と全く同じと言える。そこで、規則 version 2 を次のように改訂する。

規則 version 3 (左から右に繰り返し適用)

疑問詞があったら、そこから始めて、それを c-command する最初の「カ」あるいは「モ」あるいは「デッチャ」あるいは「タッチャ」の手前まで (なければ文末まで)、ピッチを平らにし、「カ」や「モ」等まで (なければ文末まで) を、1つの音韻句にせよ。

4. 規則の定式化

4-1. 平らなピッチ・音韻句

ここで、規則 version 3にある、疑問詞から、それを c-command する最初の「カ」や「モ」等の手前まで (なければ文末まで) が平らなピッチになる、ということと、疑問詞から「カ」や「モ」等まで (なければ文末まで) が1つの音韻句になる、ということについて、定式化を試みる。

まず、平らなピッチであるが、これは、疑問詞以後、「カ」や「モ」等の手前まで (これについては後述)、全てのアクセントを消去する規則 (AD と略す) が適用された結果だと考えられる。「はじめに」で述べたように、当方言では、名詞は語彙的アクセントを持っているが、動詞・形容詞はアクセントの対立がなく、動詞句で終わる音韻句の、後ろから2番目のモーラを含む音節にアクセントを付与する規則 (AA と略す) によって、アクセントの位置は自動的に決まるものと考えられる (詳細は、早田 (1985, p. 21 ff.) を参照のこと)。ここで、AD と AA の順序付けは、AA → AD でなければならない。仮に AD → AA だとすると、AD では名詞等の語彙的アクセントしか消去されず、その後 AA で動詞句で終わる音韻句にアクセントが付与され、疑問詞を含む音韻句でも、次のようにアクセントが出てしまう (|| は音韻句境界を示す)。

|| ドノパン || タベタ || → AD → || ドノパンタベタ || → AA → || ドノパンタベ
タ || → ピッチ指定・イントネーション指定 → *ドノパン タベタノ

次に、音韻句の問題を考えてみよう。早田 (1985, p. 26) には次の記述がある (# は単語境界を示す)。

次のように句を切ってもアクセント (◌) は出てこない。

na ◌ n # ba || ta-be-ta | ne ◌ nan-ba-ta-be-ta-no ◌ C <何を食べた(の)? >

(*nan-ba-ta-be-ta-no ◌ はダメ)

この記述は、これまでの規則にもある通り、筆者の方言にはあてはまらない。筆者の方言では、疑問詞の後ろでは、それを受ける「カ」や「モ」等のあとでない限り、音韻句を切ることはできないのである。どんなに長くても、1つの音韻句にしてしまわねばならない (例文 (10) を参照)。従って、例えば、音韻句末に挿入され得る「クサ」 (大略、東京方言の「さー」にあたる) も、疑問詞のあとでは、それを受ける「カ」や「モ」等のあとでない限り、挿入出来ない。

(38) アンタクサ、キノー ◌ nan-ba-ta-be-ta-no ◌ くみさー、きのう何を食べた? >

(39) アンタ ◌ キノークサ、nan-ba-ta-be-ta-no ◌

(8) 福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン

* (40) アンタ キノー ナンバクサ、タバタネノ

(41) キノー ナンバ タバタカクサ、チョット ユーテンシャイ くきのう何を食べた
かさー、ちょっと言ってみて)

これは、疑問詞から、「カ」や「モ」等までの範囲で、全ての音韻句境界を消去する規則(BDと略す)によるものと考えられる。

ここで、ADとBDを一緒にして、「疑問詞から『カ』や『モ』等の直前までで、アクセントと音韻句境界を全て消去せよ」という規則に一本化できるだろうか。以下に、音韻句境界の消去は問題ないが、アクセントの消去は、「カ」や「モ」等の直前までとはできない、ということを示す3つの事実を挙げる。

第1に、これまでは、「……カ」や、「……モ」、「……デッチャ」、「……タッチャ」の下がり目は、「カ」や「モ」等の形式の持つ語彙的なアクセントが実現したものと、暗に考えてきた(図6)。

|| 疑 問 詞 … ㄣ …… || …… ㄣ …… || …… ㄣ …… ㄣ カ ||
↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ (↓は消去を示す)

[図6]

ここで、4つの形式が、疑問詞表現と結び付いた場合(イ)と、疑問詞表現以外と結び付いた場合(ロ)とを比べてみよう(表1)。なお、「サカナ」は平板型である。

	カ	モ	デッチャ	タッチャ
(イ)	ドノサカナカ	ドノサカナモ	ドノサカナデッチャ	ドノサカナ タバタッチャ
(ロ)	サカナカ	サカナモ	サカナデッチャ	サカナ タバタッチャ
		～サカナモ		

[表1]

(イ)と(ロ)で違うのは「モ」の場合だけであるが、その「モ」は、(ロ)の場合揺れがあり、前アクセント(ㄣモ)とは言いにくい。しかし(イ)の場合には、揺れは無く、安定して低いピッチで現れるわけで、それは、「モ」固有のアクセントが実現したものとは言えない。何かの規則によるものとせねばならない。しかしここで、「モ」が疑問詞表現に続く場合(イ)にも、ピッチは後ろから2番目の音節まで高い、ということに注意しよう。「カ」「デッチャ」「タッチャ」については、疑問詞表現に続くか否かに関わらず、後ろから2番目の音節まで高い。そこで、「モ」の場合だけ規則で説明し、他の3つが疑問詞表現に続く場合には、語彙的なアクセントが実現している、とするよりは、4つ全てについて、疑問詞表現に続く場合には、「後ろから2番目の音節にアクセントを付与せよ」という規則が働いている、と記述することに^{注6}する。

第2に、次の例を見ていただきたい。「モ」や「デッチャ」・「タッチャ」はだめだが、「カ」は、後ろにさらに助詞が来れる。

(42) ダレガ クルカワ ワカラン <誰が来るかはわかんない>

(43) ダレガ クルカモ ワカラント ノ <誰が来る(の)かもわかんないの?>

(44) ダレガ クルカダケ オシエチャッテン <誰が来るかだけ教えてくれ>

以上のように、「カ」のピッチは高くなり、音韻句の最後の音節だけが、低いピッチになっている。^{注7}つまりこれまで見てきた疑問詞を含む音韻句でも、最後のピッチが下がるのは、「カ」や「モ」といった特定の語彙のもつアクセントによるのではなく、それらを含む音韻句の、後ろから2番目の音節にアクセントを付与する規則が働いている、と考えられるのである。この分析を支持する第3の事実を、次にあげる。

4-2. 「カイナ」<……かな>

「カイナ」<……かな>を文末にとる例を見てみよう。

(45) ドレカイナ <どれかな?>

(46) コレカイナ <これかな?>

(47) イツキョートイクカイナ <いつ京都行くかな?>

いずれも平らなピッチは文末までいかないのだが、(45)と(47)では、「カイナ」の「イ」の手前で止まっている。これだけ見ると、「カイナ」は「カ」と同様に、平らなピッチを阻止する力があり、また、第1音節にアクセントがあるように見える(即ち、「カ^{注8}イナ」)。しかし、(46)を見ると、「カイナ」は前アクセントをもつ(「カイナ)ということが明らかであり(「コレ」は平板型)、矛盾が生ずるのである。だが、4-1で見たように、(45)と(47)では、「カイナ」の語彙的な前アクセントは、ADによって消去され、その後、「カイナ」を含む音韻句の、後ろから2番目の音節にアクセントが新たに付与された、と考えれば、この矛盾は解決される。

つまり、統語部門(syntactic component)の出力(output)に対して、まず音韻句境界挿入規則や、アクセント付与規則(AA)といったものが適用されたあと、疑問詞から始まって「カ」や「モ」、「カイナ」等を含む音韻句(その音韻句の句末の境界は含まない)までの範囲で、アクセント消去(AD)と音韻句境界消去(BD)が起こり、その結果1つになった音韻句の、後ろから2番目の音節に、アクセントが付与される、と考えられるのである。ここで、規則の最終的な定式化をし、「カイナ」を含む例の派生を示しておく(図7)。なお、2-1で、同一センテンスに複数の疑問詞が現れる場合の付則を設けたが、ここでは、規則aを、規則bと同じく、左から右に繰り返し適用される規則とし、付則を組み込んである。

最終 version (これを「**疑問詞規則**」とする)(左から右に繰り返し適用)

- a. 疑問詞があったら、そこから始めて、文末、またはセンテンスを同じくする疑問詞の直前(直前の音韻句境界は含まない)まで、アクセントと音韻句境界を全て消せ。
- b. 疑問詞があつて、さらにその疑問詞を c-command する、「カ」または「モ」または「デッチャ」または「タッチャ」または「カイナ」、がある時には、疑問詞から始めて、それら「カ」、「モ」等(複数ある場合は最初のもの)を含む音韻句の句末まで(句末の境界は含まない)、アクセントと音韻句境界をすべて消せ。結果として1つ

(10) 福岡市の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン

になった音韻句の、後ろから2番目の音節に、アクセントを付与せよ。

a, b 2つの規則は、非該当条件(Elsewhere Condition)により、二者択一的(disjunctive)に適用される。即ち、bが適用され得る環境では、bしか適用されず、aは適用されない。

派生例(単語境界、ブラケット等は省略)

コノンド イツ キョート イク カイナ = 統語部門の出力

↓
音韻句境界挿入規則・動詞句アクセント付与規則

|| コノンド || イツ || キョート || イク || カイナ ||

↓
疑問詞規則 (b)

|| コノンド || イツ キョート イクカ | ナ ||

↓
ピッチ指定規則

コノンド イツ キョート イクカイナ <今度いつ京都行くかな?> = 音声形

[図7]

5. おわりに

さて、以上のように、当方言では、文中に疑問詞があると、その文のピッチパターンは、ほかの文(疑問詞を含まない疑問文(yes/no question)や、平叙文)と際だった対照をなす。結果的に、平らなピッチは疑問詞表現であることを示している、と言えるのだが、これは、音韻句境界やアクセントを消去する規則が働いた結果であり、現象としては、イントネーションではなく、あくまでアクセントに関わるものである。しかし、そこにシンタクスが深く関わっているというのが、おもしろいところだろう。

本稿に挙げた言語事実は、あくまで筆者の個人方言のそれであるが、福岡市出身の若年層の方言を、ほぼ代表するものと言ってよい。例えば、「モ」の場合、「カ」と違って平らなピッチが途中で下がるインフォーマントがいるとか(注5参照)、助詞等の語彙的アクセントに若干違いが見られる(注6参照)といった程度で、要するに語彙的な差異は見られるものの、現象自体には変わりがない。老年層については、早田(1985)に、疑問詞1つを含む文について、ほぼ同じ観察が見られる。筆者の簡単な調査では、福岡市周辺、西部及び東部でも、少なくとも疑問詞1つを含む文については、同じ現象が見られる。この現象の分布範囲を確定することは、今後の課題である。

日本語の方言の中には、沢木(1984)に報告されている青森県金木町、同弘前市の方言のように、yes/no questionの文末には「ナ」が、wh-questionの文末には「バ」がつく、というように、文末助詞で2種類の疑問文を区別する方言もある。東京方言でも、Chiba(1979)に指摘されているように、「行くかい?」(yes/no question)は可能だが、「誰かい?」

(wh-question) は不可であり、「誰だい?」と言わねばならない等、「かい」と「だい」の分布は、yes/no question と wh-question の違いを反映している。本稿で記述した福岡市方言のように、平らなピッチが疑問詞表現であることを表わす、という方言もある。似たような現象を示す方言・言語が、ほかにも多くあるであろう。識者の御教示を請う。

注0 本稿は、1987年11月28日の、九大言語科学研究会、第25回研究発表会で発表した内容に、手を加えたものである。さまざまなコメントをくださった方々、及び多くのインフォーマントの方々に感謝する。

注1 筆者は、1957年生まれ、男。22歳まで、福岡市城南区片江(福岡市を博多地区と福岡地区に大きく分ければ、福岡地区)に住み、以後、同早良区(福岡地区)、さらに県内の嘉穂郡、粕屋郡と転居した。以下では、特に次のインフォーマントの方々について、筆者の内省と違う点のみを、注に記すことにする。

坪内佐智世氏(A氏と略):1967年生まれ、女。福岡市東区馬出(大きく言えば博多地区)の生え抜き。

久保謙哉氏(B氏と略):1959年生まれ、男。19歳まで福岡市城南区片江、以後東京都豊島区に転居。筆者の弟。

古本秀子氏(C氏と略):1957年生まれ、女。福岡市博多区須崎町の生え抜き。

田中雅美氏(D氏と略):1956年生まれ、男。福岡市中央区梅光園(福岡地区)に29歳まで、以後同早良区に転居。

注2 トリ(ガ)、ソラ(ガ)、ヤマ(ガ)のように、n音節名詞(nは自然数)にはn+1通りのパターンがあること、東京方言に同じである。ピッチの下がり目だけが弁別的であるから、基底アクセント表示は、例えば、トリ、ソ[↑]ラ、ヤマ[↑]のように表わすことができる。動詞句で終わる音韻句では、アクセントは、後ろから2番目のモーラを含む音節に付与される(4-1も参照)。ピッチ指定規則は、次のとおりであり(a、bの順で適用)、東京方言のそれとほぼ同じである。「アンタ」等、一部語彙的な例外がある。

a. 音韻句の句頭から句中最初の有アクセント音節まで(なければ句末まで)「高」(有アクセント音節の第2モーラは「低」)とせよ。それ以降は「低」とせよ。

b. 音韻句の第2モーラが「高」なら、第1モーラは「低」とせよ。

注3 博多方言の老年層をインフォーマントとした早田(1985, p.25)にも、同様の記述があるが、筆者のインフォーマントA氏、B氏、C氏にあっては、単独形でのピッチについて、はっきりした内省ができないようであった(D氏は筆者と同じ)。しかし、疑問詞自体のピッチ形が「ド[↑]」[ナ[↑]三]のようなものであったとしても、以後の議論には大した違いはない(注10参照)。

注4 実は、この規則は、早田(1985, p.25)の次の部分と殆ど同じである(下線は筆者)。

疑問詞の有る文では、疑問詞から助詞「かい」/ka[↑] i/,「やら」/ya[↑] ra/,「か」/ka/等の直前まで、それらの助詞が無ければ文末まで、の間のアクセント(↑),および通常は句境界(∥),がすべて消去される。

文法上で違うのは、筆者の方言では、句境界が必ず消去されねばならない、つまり、疑問詞以後が必ず1つの音韻句をなす、という点だけである(なお、筆者は「カイ」や「ヤラ」は使わない)。

しかし、本稿の2節以下に述べる現象については、早田(1985)には記述がない。

注5 C氏では(26)(27)と(30)(31)で、D氏では(30)(31)で、「モ」ではなく、「キョー

(12) 福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン

ト」でピッチが落ちる形の方をよく使うという。

注6 A氏の内省では、4つの形式(A氏では、「デッチャ」「タッチャ」は、「デチャ」「タチャ」になる)が疑問詞表現に付いた場合(イ)と、そうでない場合(ロ)とでは、筆者の方言より違いが大きい。

	カ	モ	デチャ	タチャ
(イ)	ドノサカナカ	ドノサカナモ	ドノサカナデチャ	ドノサカナ タベタチャ
(ロ)	サカナカ	サカナモ	サカナデチャ	サカナ タベタチャ

やはり、(イ)の場合は、明らかに規則によるものとせねばならない。

注7 「カ」のあとについたこれらの助詞のうち、「モ」については、既に見たように、アクセントがあるとはっきりは言えない。「ワ」も、「サカナワ」～「サカナワ」のように、揺れがある。「ダケ」は「サカナダケ」のように、アクセントをもっている。いずれにしろ、疑問詞を含む音韻句の最後でピッチが下がるのは、最後の助詞の固有のアクセントによるものとは言えない。

注8 当方言では、CV ㄱ V と CVV ㄱ の対立はない。つまり、「カㄱイナ」と「カイㄱナ」は対立しない。

注9 ここでは、Kiparsky (1982, p.136) の定義に従う。

注10 疑問詞表現は必ず高く平らなピッチになるという規則があり、あとはどこまでを疑問詞表現とするかを定める規則がある、と考えることもできよう。そうすると、高く平らなピッチは、アクセントを全く殺して覆い被さる一種のイントネーションだと考えられることになる。

[参考文献]

沢木 幹栄 (1984) 「津軽方言における単純疑問と疑問詞疑問」『研究報告集5』 国立国語研究所

早田 輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会

Chiba, Shuji (1979) "On Interrogative Particles *-kai* and *-dai*," *Journal of Tsuda College* 11, pp.153-156.

Kiparsky, Paul (1982) "From cyclic phonology to lexical phonology," in *The structure of phonological representations (Part I)*, Harry van der Hulst and Norval Smith, eds., Foris, Dordrecht, Holland, pp.131-175.

——九州大学大学院生——

(昭和63年8月30日 受理)

(昭和63年10月31日 改稿受理)